

[学長インタビュー]

未来を紡ぎ出す 大学を目指して

静岡大学長 | 日詰 一幸

静岡大学が取り組むさまざまな活動について日詰一幸学長がどんな思いを抱いているのか。職員で結成した統合報告書プロジェクトチームメンバーが、6つのテーマ（教育・研究・地域連携・SDGs・国際連携・ダイバーシティ）に絞り、インタビューしました。



4つの重点分野を中心に 融合型の研究を進める

—静岡大学は、中期目標期間に定める重点研究分野について、取り組みを進める研究者を支援してきました。近年推進してきた重点研究分野の概要と今後目指す点をお教えてください。

国立大学法人は、6年毎に中期目標・中期計画を定め、それに基づいて大学を経営・運営していくことになっています。第三期中期目標期間では、光応用・イメージング、環境・エネルギーシステム、グリーンバイオ科学の3分野を重点研究分野に設定し、世界トップレベルの先端領域研究の確立を目標に取り組んできました。

特に光応用・イメージング分野は、静岡大学の一丁目一番地になると思います。旧制浜松高等工業学校で高柳健次郎先生が開始された研究がテレビジョン技術の礎となり、今それは電子工学研究所に引き継がれ、光分野において世界に轟く研究者を輩出しています。第四期中期目標期間では、光応用、グリーン科学、カーボンニュートラル科学、情報応用科学の4分野が選定され、これらの領域で更なる発展に向け研究を進めています。カーボンニュートラル科学分野では、世界的な取り組みである二酸化炭素排出量の削減を実現するため、基礎研究から応用研究までを視野に置きながら、幅広い知識を要する文理融合的な研究領域の開発が望まれます。第四期中期目標期間においては、国際的に通用する研究と研究者の育成を目指したいと思っています。

—静岡大学の研究力を向上させる取り組みについてもご教示ください。

2019年度から「プロジェクト研究所」という制度がスタートしています。社会的要請の高い研究や本学の特色を活かした学際的プロジェクトの推進、産学官の連携に資する研究の促進、そして教員の自主的な研究活動の強化、さらには新しい研究分野の開発を実現するため、3年間という期間の中で成果を出すことを目指して様々なプロジェクト研究所が設けられています。

いろいろな取り組みがある中、静岡キャンパスと浜松キャンパスの教員が双方協力しながら行うケースも多く、新しい融合型の研究を立ち上げ進めていくことを可能にしています。研究者の分野を超えた協力関係や、地域企業の方の参加等、新しい連携のスタイルが成り立っており、これが今後の静岡大学の研究力を向上させるひとつのきっかけ

になるのではと大きく期待しています。

—プロジェクト研究所の活動は、本当に面白い内容のものがあります。

多種多様なものがあります。特に静岡県は自然環境も歴史・文化も非常に豊かな県です。地域資源が豊富な静岡県でなければ取り組めないような研究を発展させていくと同時に、これまで培ってきた研究シーズを活かして、世界に冠たる静岡大学の研究成果を発信して欲しいと思っています。



大学のシーズを生かして 地域社会に貢献する

—静岡大学は地域ニーズの把握、地域社会との共創による課題解決の取り組みを目標としていますが、本学の地域連携における基本の姿勢についてお伺いします。

静岡県は人口減少や災害、特に地震災害といった大きなリスクを抱えています。こうした課題に対して、大学のシーズを活かし地域に最大限貢献していきたいと考えています。その中で富士山や駿河湾といった自然環境、徳川家康公を中心とした歴史文化、日本でも有数の経済圏といった地域の優位性を生かしていくことが大切になります。

本学の理念が「自由啓発・未来創成」とあるように、我々は、何事にもとらわれない自由な発想で取り組む「自由啓発」に加えて、未来を創成していくという任務も持っているということを高らかに世に表しています。地域の知の拠点にふさわしい質の高い教育、創造的な研究を推進していくことによって、地域と社会の発展に貢献するということを大きな目標としています。例えば、静岡県においては、伊豆半島の地域的な発展を本学がどのように下支えしていくかということを期待されています。そこで松崎町にプラット

学生の主体性を尊重し 学びの幅を広げる

—静岡大学では教育目標に基づき、多様な文化と価値観を尊重する豊かな人間性とチャレンジ精神を有する人材を育成するとありますが、学生のキャリア形成にとって重要なことについて伺います。

一番大切にしていることは学生の自主性、主体性です。本学では、学生が将来就きたい職業であるとか、あるいは自身の人生をどのように設計していくのか、そういったキャリア形成を行っていくための環境を整えています。具体的には、初年時から自身の進路を考える「キャリアデザイン」科目の必修化、学生一人一人の学びの方向を把握し助言やサポートができる「キャリアポートフォリオ」システムによる学生への指導、インターンシップ活動の充実等を行ってきました。

—静岡大学には多様な学生が在籍しており、一例として、精神面を含め何らかの障害を持った方も本学で多く学ばれています。そのような学生に対する支援体制の在り方についてはいかがでしょうか。

本学に入学した学生が満足感をもって卒業していくということが、私はとても大事だと考えています。そのために、多様な学生たちそれぞれが、孤立することなくサポートを受けられるような、そういう仕組みを大学として作っていく必要があります。本学の支援体制の最初は、「学生支援センター」によるキャリア関係の手助けが中心でしたが、様々な障害を持つ学

生が増えてきて、特にメンタルの障害を抱えているケースが増えている中で「障害学生支援部門」を置いて対応しています。本学はそうした学生が円滑に学び続け、卒業し、将来自己実現をできるような環境づくりに努めています。その中で大切にしているのは、1対1の関係ではなくて、本学の様々な方々が関わり合いながら学生支援をしていく体制の構築です。

—主にキャリア形成支援と多様な学生への支援に関して伺いました。それらをふまえ、静岡大学は今後どういった人材育成を目指していきますか。

本学の教育目標にその答えがありまして、わかりやすく言えば、社会を取り巻く諸課題に関心を持つ人材を育成し、ひいては地域の期待に応えることができるような大学にしておくことです。「グローバル共創科学部」の新設もその一環です。この新しい学部では、未来の様々な課題に対応できるような、共創型の人材を育成することを目標としています。最初に学びの幅を広げておいて、次第に関心に沿いながら、専門分野を狭めていく、「レイトスペシャライゼーション」という教育のスタイルを導入しています。これは全学的にも言えることだと思いますが、学部学科では、学年が進行するにつれて次第に学びの幅を広げづらくなってしまいます。分野を超えて文理融合型のスタイルで学び、さらにグローバル化にも対応できる、総合的な学びのスタイルを提供することで、これからも静岡大学の人材育成を進めていきたいと考えています。

また、リスキリングやリカレント教育の面でも、本学が持っている資源を駆使して、地域の方々に学びの機会を提供し続けたいと思っています。

フォームを構築し、自治体、企業や住民の皆様と地域の発展に取り組めるよう動いています。

他にも大学として様々な活動をしています。新聞社と連携した講座が大きなものとして2つあり、1つが読売新聞との連続市民講座、もう1つが中日新聞との連携講座です。こういった活動が本学にとっては非常に大きな地域貢献の取り組みだと考えています。現代社会が抱える諸課題に対して、学問的にどのようにアプローチできるのか、あるいは既に行っているのかということ、地域の方々に伝えていく役割を担っています。これらの講座は、静岡キャンパス、浜松キャンパスの教員が協力して展開しており、静岡大学の教員のリソースだけで足りない部分については地域のほかの大学からの協力を得ながら進めています。この市民講座は、地域の方々からも非常に期待をされており、毎年多くの方々を受講していただいています。

—今後、地域社会において静岡大学が果たすべき役割はどのようなものがありますか。

本学の研究の成果等を、地域へ還元していく中で、そこをうまくコーディネートする組織が必要になってきていると感じます。その1つとして未来社会デザイン機構がありますが、そこだけではなく、学内での取り組みが、組織として連携強化されることが必要です。加えて、「学」というものが「産」、それから「官」とどのように連携していくのかということも大切です。産官学の地域課題解決のプラットフォームを作っていく際には、本学も機動的に入っていけるようなフレキシブルな体制を整えたいと思います。

大学が地域と世界を繋ぐ 国際化の拠点に

—従前より国際交流活動は活発に行われていますが、現在は来日留学生数がコロナ禍前の水準に戻りつつあります。今後の国際交流について、展望をお聞かせください。

大学が地域社会と世界を繋いでいく、そういう人材を育てていくことは極めて重要であり、本学に来て学んでいる海外からの留学生が、本国に帰ってその国と日本との橋渡しになる、そのような人材を一人でも増やしていくことが大事だと思います。

先日、フィリピンのマリアノ・マルコス国立大学の学長とその関係者の方々に訪問していただいたのですが、学長は

本学の静岡キャンパスで学ばれた方で、静岡大学で学んだことにとても誇りを持っておられました。その方だけでなく、浜松キャンパスでも、学位を取って本国にお帰りになり、今は本国の大学で教鞭をとっていらっしゃる方々が相当数いらっしゃいます。そういう意味で、これまで静岡大学は、特にアジアを中心として、人材の輩出に貢献してきたといえるのではないかと思います。今後も、人や文化、産業の橋渡しとなるような国際化の拠点形成、それに向けた取り組みを進めていきたいと思っています。

また、新型コロナウイルスの流行により、教育研究環境が大きく変わりました。対面の授業ができなかったのは、これまでにない経験でした。全学をあげて、オンライン教材の開発に取り組んだ結果、オンライン教育に対してのハードルがぐんと下がりました。この経験は、今後、国際的な面でいろいろと活用できそうだと思います。例えば、渡日できない留学生に対して、日本の教員がオンライン教育を行うこともあったわけです。以前から海外の大学との共同学位制度（ダブルディグリープログラム）を導入していますが、オンライン教育を活用して、コロナ前よりも効果的に上手く教育連携プログラムを進められるようになったのではないかと思います。

コロナが一段落しつつありますので、今後は、留学生の受入れの機会を増やしていくことが大事だと思います。それと同時に本学の学生たちもどんどん海外に出て、たくさんの経験を積んで帰ってくるという取り組みを進めていきたいので、留学を推進するためのカリキュラムを整備していかなければならないと思っています。そのために、学内の連携体制を強化しなければいけないですし、さらに世界とも上手くつながって、静岡大学の名前を海外の大学にも知られるような、取り組みをしていきたいと思っています。



ウェルビーイングの 実現のため 多様な機関と連携する

—静岡大学におけるSDGsへの現状の取り組みについて伺います。

2020年に設立された「サステナビリティセンター」ではSDGsに関連した学内の活動の情報集約・発信、事業連携コーディネートやネットワークの形成・運営に注力しています。というのも現在は課題が複雑化・大規模化しており、解決に向けては、同じ関心・シーズをもつ機関との繋がりが必須となるからです。具体的には、「SDGs未来都市」に認定された静岡県の6都市との連携の模索が挙げられます。国内のみならず、タイやインドネシア、フィリピンの5大学とSDGs教育をテーマにした「ESD Forum」も毎年開催しています。また、カーボンニュートラル分野では、清水エスパルスのゼロカーボンプロジェクトの支援や、「静大発！カーボンニュートラル研究最前線」による研究活動の発信に取り組んでいます。



—現在、多くの団体がSDGsに取り組んでいます。その中で、静岡大学として何を目指していきますか。

目指すゴールが多分野にわたるSDGsにおいて重要になってくるのは、解決が難しい地球環境問題の中で皆さんが幸福を感じられるウェルビーイングの実現であり、そういった社会を将来世代に残すことが我々の責務ということです。そこに向かうには、多様な機関との連携が重要であり、パートナーシップの構築には、信頼関係を如何に育むのか、ということが鍵となるのではないのでしょうか。そのためには静岡大学がどんな研究シーズを持っていて、SDGsにおいてどのようなことに貢献できるのかを対外的に発信していく必要があります。そこを明確にして静岡大学もSDGsに貢献している大学の一つだと発信していくことで、様々な組織や団体とつながり、SDGsの取り組みをさらに発展させていきたいと考えています。

ダイバーシティとは 大学の活力の源

—近年、個々の多様性を大学経営に活かすことが求められています。静岡大学におけるダイバーシティについての考え方を伺います。

性別、エスニシティ、障害、世代、ライフスタイルなど、いろいろな異なる背景を持った人たちが大学の中にいると考えています。そういった様々な価値観を持った方々が共に学び、共に働くキャンパスをどのように作っていくのが大きな課題です。「誰一人取り残されない社会」を作っていくという考え方のもとで、このダイバーシティというものをとらえる必要があると考えています。

そうしたキャンパスを作るために、様々な取り組みが必要です。男女共同参画に関しては他大学に先駆けて取り組んできました。今後はその取り組みを充実させながら、女性教員、女性管理職の採用、ワークライフバランスの実現、修学環境の充実などの課題に取り組んでいきたいと思っています。

—ダイバーシティの推進により静岡大学はどのように変化していくと思いますか。

様々な環境や状況の中にいるの方々、様々な考え方を持っている方々がいることによって、いろいろな方向に発展できる可能性をもつことができるのではないかと思います。大学の多様性、つまりダイバーシティこそが実は大学の活力の源であり、発展の原動力になると考えています。今後、男女共同参画推進室からダイバーシティ推進室への拡張整備やダイバーシティ宣言を行って静岡大学のダイバーシティ推進戦略の策定を行う予定です。様々な取り組みを行っていく中で、「誰一人取り残されない静岡大学」を作っていくことがとても大事になってきます。ダイバーシティに関しては、地域と連携、協働し、ダイバーシティのメッカになれるような大学になれると良いと思います。

私たちがインタビューしました！



インタビューを行った統合報告書プロジェクトチームメンバー